

学生大使 実施報告書

氏名：五十嵐清佳

学部・学科（コース）・学年：地域教育文化学部・地域教育文化学科（文化創生コース）・2年

派遣先大学：ラトビア大学

派遣期間：2024/09/01～2024/09/14

1 日本語教室での活動内容

日本語教室では、毎日 16:10～17:40 と 18:00～19:30 の 2 回、90 分間の授業を行った。6 人の山大学生に対し参加者は計 10～20 人ほどで、社会人の方も多く来てくれた。参加の動機は様々であったが、日本やアジアの文化に興味がある方、言語を学ぶのが好きな方が多い印象を持った。

日本語のレベルも個人差が大きく、担当する相手に合わせて内容を工夫する必要があった。まず、初級者には挨拶や自己紹介、ひらがなとカタカナの読み方などを教えた。また、言葉を教えるだけでなく、日本の文化、具体的には日本の食べ物や学校生活、年中行事などについて話すこともあった。同時にラトビアの文化についても教えてもらい、それぞれの国の違いで盛り上がった。次に、中級者には、簡単な文章を教えた。事前に 5 文型を使って教える方法を聞いていたが、実際に文法を説明するのは難しく、参加者の方々の理解力に助けられた場面が多かったように思う。また、「これは日本語で何というの？」と質問をもらい、文法の枠から外れて言葉を教えることもあった。ときに難しい質問をされることもあったが、一緒に答えを調べたり話し合ったりすることでお互いの理解を深めることができた。最後に、上級者とは主に日本語での会話練習をした。日本人とほとんど変わらないテンポ、内容で話せる方が何人もおり、その言語能力の高さには驚いた。私は初日の自己紹介で心理学を専攻していると話したのだが、それを覚えていてくれた参加者の方がおり、私と心理学について話したいと言ってくれたことはとても嬉しかった。遠く離れた国で同じ分野に関心を持つ人と出会えたことはとても嬉しく、これから大学での勉強をさらに頑張ろうという励みにもなった。このように言語学習の域を超えて深い対話が行えることは、この日本語教室の大きな強みではないだろうか。

最終日には日本文化の紹介を行った。食べ物、書道、折り紙、けん玉などたくさんものがある中で、私は主に浴衣のコーナーを担当した。すると着物を着てみたいという参加者が想像以上に多く、次から次へと着付けていくのが大変なほどであった。しかし、感じる喜びもそれだけ大きく、浴衣を持参して良かったと心から思えた。

2 日本語教室以外での交流活動

今回は日本語教室で出会った方と 0 から関係を築く必要があったが、ラトビアの皆さんは親切ですぐに仲良くなることができ、一緒にご飯を食べたりラトビアを案内してもらったりした。まず、平日の外出で特に心に残っているのは、リガの旧市街を案内してもらった日のことだ。「バルト海の真珠」と称されるリガの街並みはどこを切り取っても美しく、立ってい

【学生大使 実施報告書】

るだけでも絵画の中に迷い込んだような気分だったが、猫の家やスウェーデン門など一つ一つの建物についてその背景を教えてもらいながら回ることで、その美しさをより堪能することができた。また、国立歌劇場にオペラを見に行った日も印象深い。初めてオペラハウスと呼ばれるキラキラした場所へ足を運び、圧巻の演奏を楽しんだ時間は本当に一瞬だった。入場料は比較的安く、このような素晴らしい音楽に気軽に触れられるラトビア人を羨ましく思った。休日には少し遠出をした。まず土曜日は、バスに乗ってアスレチックと動物園へ向かった。命綱をつける本格的なタイプのアスレチックはとても難しく、動物園では初めて見る種類の生き物たちに驚き、ハードな一日ではあったがとても楽しかった。そして日曜日には、友人が長時間運転をしてくれ、車でクルディガとベンツピルスという町へ行った。どちらもとてもどかで良い場所だった。クルディガで滝の上を歩いたときに私のサンダルが流されてしまったことは少しショックだったが、ベンツピルスの綺麗な海のおかげでとても素晴らしい1日になった。他にもルンダーレ宮殿というお城に行ったことなど、ここには書ききれないほど多くの思い出ができた。

3 参加目標への達成度と努力した内容

私は「積極的にコミュニケーションをとる」とことと「対話を通してラトビアの文化や歴史を知る」ことを目標にしており、どちらもおおむね達成できたと感じる。前者についてはあまり得意ではないことなのだが、ラトビアの皆さんが分かりやすく話をしてくれたおかげで、こちらも安心して様々な質問をすることができた。私の英語力は十分とは言えないが、とにかく相手に伝えることを意識し、持てる知識を総動員して話した。その結果、果たすことができたのが後者の目標である。やはり本やネットからの情報のみでは判断できないことが多い。話していて疑問に思ったことはその場で聞き返すことで、ラトビアという国やラトビア人の国民性について理解を深めることができた。

4 プログラムに参加した感想

今回は昨年インドネシアに続いて2度目の参加であったが、前回とはまた色の異なる有意義な2週間だった。ラトビアは複雑な歴史を持つ国であり、滞在中にもドイツやロシアの影響の強さを感じる場面があった。ラトビアの歴史について少し勉強してきたつもりではあったが、会話中に気が付くことや教えてもらうことのほうが多く、観光でラトビアに来ていたらこんなに多くの学びは得られていなかっただろうと感じた。またラトビアへの学生大使派遣は久々ということで、現地の人とどれだけ関われるのか、日本語教室は上手くいくのか、など不安も多いスタートだったが、皆さんとても暖かく迎えてくれて安心した。ラトビアの皆さんは親しみやすく、穏やかで少しシャイな部分が日本人に似ていると感じた。そんな友人たちとの出会いに感謝し、ラトビアでの経験を今後の活動に活かしていければと思う。

5 今回の経験を踏まえた今後の展望

この2週間を終え、「もっと様々な場所に行ってみたい」「様々な人と関わってみたい」と感じた。自分にはない価値観、風景と出会う度、私は自分の小ささを感じる。小ささといって

【学生大使 実施報告書】

もネガティブな意味ではない。世界の中で自分の想像できる部分が増えるという意味で、私はこの感情が生まれる瞬間が好きだ。これからもそんな経験をたくさんしたい。また、そのためにも英語力の向上に励もうと思う。ラトビアでは英語で話す時間が多く、自分の語彙の少なさを実感した。多くの言語を使いこなすラトビアの皆さんを目標に、努力していきたい。



浴衣の着付け



クルディガの滝の上を歩いた様子

【学生大使 実施報告書】



ルンダーレ宮殿



猫の家